

平成21年度農業環境技術研究所評議会の開催

平成21年度の農業環境技術研究所評議会を3月19日、当所大会議室において開催しました。評議員の方々を以下に紹介します。

【外部専門家・有識者】 大沼あゆみ(慶応義塾大学経済学部教授)、古在豊樹(千葉大学環境健康フィールド科学センター教授、委員長)、三枝正彦(豊橋技術科学大学先端農業・バイオリサーチセンター特任教授)、根本久(埼玉県農林総合研究センター水田農業研究所所長)、松永和紀(サイエンスライター)、山崎洋子(NPO田舎のヒロインわくわくネットワーク理事長)。

【関係研究機関・行政機関】 西郷正道(農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課長、ご欠席)、大垣真一郎(国立環境研究所理事長)、堀江武(農業・食品産業技術総合研究機構理事長、ご欠席)、鈴木和夫(森林総合研究所理事長)、高柳和史(水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所所長)。

農環研理事長挨拶の後、農環研より平成21年度の研究所の運営、研究成果、調査・研究の進捗状況等の業務実績について報告。評議員より質問や意見を頂きました。評議会後に各評議員が書面評価を実施し、それらを集約して評議会としての評価結果をとりまとめることとしました。

評議員より頂いた講評のうち代表的なものを以下に示します。

- ・リスク評価、リスク低減に関する研究は、現場で活用されてこそ意味がある。また、海外への技術移転も重要。コスト低減など、成果を現場へ移す手法も検討することが必要。

- ・土壌の分類体系や昆虫・微生物のインベントリー構築では、他機関との連携の下、国全体の取り組みを先導することを期待。

(企画戦略室長 井手 任)

NIAES トピックス



フェイス

FACE実験 つくばみらいで開始

報告

田面上に設置された八角形のリング

農環研は、気候変化が農業へ及ぼす影響を調べ、適応技術を開発するための研究拠点として、「つくばみらいFACE実験施設」を茨城県つくばみらい市の水田に設置し、今年度から実験を開始しました。

FACE (Free Air CO₂ Enrichment; 開放系大気CO₂増加) とは、屋外条件で高CO₂濃度を実現するもので、この施設では、水田の一部に差し渡し17mの正八角形状にチューブを設置し、風向きに応じてCO₂を放出します。正八角形区画内のCO₂濃度は外気よりも約200ppm高い約590ppmに制御され、おおよそ50年後に想定されるCO₂濃度下での作物の生育や、水田からの温室効果ガスの発生などを調べます。また、CO₂制御区内に水温上昇区、多肥区、品種・系統比較区などを配置することにより、CO₂濃度の影響が温度、肥料、品種によってどのように異なるかを調べ、気候変動に対する適応技

術や緩和技術の開発を支援します。

農環研は、平成10年～20年度にかけて、農研機構東北農業研究センターと共同で、岩手県岩手郡雫石町においてFACE実験を実施し、寒冷地イネ単作地帯で多くの知見を得ました。しかし、FACE実験は世界でもまだ実施例が少なく、さらに多くの研究事例の積み重ねが必要です。そのために、雫石より温暖で、周年実験が可能であり、かつ多くの分野の農学研究者が結集できるつくばみらい市にFACE実験施設を設置しました。この施設での研究を予定している研究者は、農環研、農研機構作物研究所、農業生物資源研究所、山形大、千葉大、東京農大、東工大、島根大、東北大などの約30名です。

(大気環境研究領域 長谷川 利拡)